

- (16) 同上, p.10.
 (17) 中島義明ほか〔1999〕『心理学辞典』有斐閣社, p.221.
 (18) クルト・コフカ (鈴木正弥監訳)〔1935〕『ゲシュタルト心理学の原理』福村出版, p.21.
 (19) 同上, p.665.
 (20) 中島義明ほか〔1999〕前掲書, p.65.
 (21) P.F. ドラッカー (上田惇生訳)〔1989〕前掲書, p.298.
 (22) 森敏昭, 中條和光〔2005〕『認知心理学のキーワード』有斐閣社, p.2.
 (23) P.F. ドラッカー〔1993〕前掲書, p.213.
 (24) P.F. ドラッカー (上田惇生訳)〔1973〕『エターナルコレクション版 マネジメント (中)』ダイヤモンド社, p.143.
 (25) 同上, p.158.
 (26) 中島義明ほか〔1999〕前掲書, p.661.
 (27) 同上, p.661.
 (28) 同上, p.664.
 (29) P.F. ドラッカー〔1993〕前掲書, p.215.
 (30) 道又邇ほか〔2003〕『認知心理学』有斐閣, p.277.
 (31) P.F. ドラッカー〔1989〕前掲書, p.298.
 (32) 同上, p.299.
 (33) J.J. ギブソン (古橋敬他訳)〔1979〕『ギブソン生態学的視覚論』サイエンス社, p.276.
 (34) 道又邇ほか〔2003〕前掲書『認知心理学』, p.23.
 (35) J.J. ギブソン〔1979〕前掲書, p.324.
 (36) エドワード・リード他編〔2004〕『ギブソン論文集 直接知覚論の根拠』勁草書房, p.26.
 (37) P.F. ドラッカー〔1993〕前掲書, p.314.
 (38) P.F. ドラッカー (上田惇生訳)〔1964〕『エターナルコレクション版 創造する経営者』ダイヤモンド社, p.243.
 (39) P.F. ドラッカー〔1993〕前掲書, p.313.
 (40) W. ジェームズ (今田寛訳)〔1892〕『心理学 (下)』岩波書店, p.80.
 (41) P.F. ドラッカー (上田惇生訳)〔1989〕前掲書, p.300.
 (42) 貫成人〔2004〕『哲学マップ』筑摩書房, p.203.
 (43) 貫成人〔2008〕『図説・標準哲学史』新書館, p.221.

【略歴】 本会監事, 小樽商科大学大学院商学研究科修士課程修了, 佐藤等公認会計士事務所所長, (株)ヒューマン・キャピタル・マネジメント取締役副社長, その他11社の取締役監査役歴任, 小樽商科大学ビジネス創造センター学外協力スタッフ.

非定住的思考の起源

——ツヴァイク, ラーゲルレーブ, ムーシルをめぐって

The Origine of His Nomadic Approaches: In Reference with
Zweig, Lagerlöf, and Musil

井坂康志

Yasushi Isaka
(東洋経済新報社)

Summary

The concept of management comes from Drucker's formative years' writings. Drucker didn't state his experiences and thought in his youth when he lived in Vienna and Frankfurt clearly, however, his earliest reference to them appears in 1976, *Adventures of a Bystander*. It offered the explanation of background as invention of management, and it also shows that the term management is all too often associated only with his private life and his Normadic Approaches. Many people think of him as a writer on business management alone, in reality, Drucker's view was much larger, encompassing questions of the nature of humankind, and meaningful existence.

序

現在にあって, ドラッカーの名は欧米圏のみならず, 日本・韓国・中国をはじめとするアジア諸国, 新興国にあって多様な活動に携わる人々惹き付け, 文化の壁を易々と乗り越えて受け入れられ, あたかも知のマスター・キーのごとく実用に供される。そのような実見に徴するならば, ドラッカーの言説は既に世界性の指標として差し支えない。マネジメントという知的領域一つをとってみても, そこまでの世界性を獲得した書き手は極めて稀である。もはやその世界性は知の区画を超えたところにあり, 教養知の成り立ちそのものを刷新する力を秘めるのを認めざるをえない。

他方ドラッカーの作品は作品そのものとして評価しなければならない。彼の作品について一つ確実な事実があるとすれば, それが世界中の読者に愛され, 繰り返し読まれるということである。そこで問われるべき問いが一つある。ドラッカーについて, 彼がそこに絡め取られていたはずの信仰の制約や民族誌的偏見やイデオロギー的限界を論じることがあるとしても, 「それにもかかわら

ず世界性を獲得できた」理由は何かというところである。ドラッカーについては人種、宗教などについて今なお謎の部分が多く残すものがあるが、もしドラッカーと「ローカルなしがらみ」の間に生産的な批評的論件があるとすれば、「どのようにして彼はローカルなしがらみから自己解放し、世界性を獲得しえたのか」をこそ問うべきと思われる。

彼自身は、ごく限定的にしか自らの出生や生育環境に言及していない。その点、H・サイモンが指摘するごとく、彼が無国籍かつ非定住の書き手を自ら志したのはおそらく事実だろう。だが、非定住であることと世界的であることのあいだには千里の逕庭がある。まずもって本論では彼の残した数少ない自伝的作品『傍観者の時代』を手がかりに、その非定住性と世界性を架橋しうる論理の探索に持てる知的リソースをいささかなりとも投ずることにしたい。

1 生育環境——非定住的知性の起源

1-1 世紀末ウィーンとギムナジウム

ドラッカーが自らの理論展開にあたって脱ウィーン、脱ヨーロッパの志向性を強く持っていたことは意外に知られていないし、そのことと後年の知識論やマネジメントといかなる関係があったかについてもほぼ顧みられたことはない。しかし、そこで注意しなければならないのは、彼がシュヴァルツヴァルト夫妻をはじめとするウィーンの知的交流を基盤とし、その教養文化を内面化しながらも、同時に批判的な検討を重ね旧時代の社会に強い反発を示していったところにある。

20世紀の初めにかけてドラッカーの思想形成に影響力を持つオーストリア人が、いずれも卓越した知的創造力を持って当時の指導的役割を果たしてきたことはしばしば指摘される。だが反面、彼らがなご古都ウィーンの停滞した文化風土の影響から脱しきってはならず、内面的に強く依存していたのも確かであった。そのようななかで、ドラッカーが自ら直面した現実を経験的課題として取り込み、そのための理論と方法の構築に向かっていくには、単なるウィーン的知の後継者としてではなく、そこからのさらに冒険に満ちた命がけの飛躍を必要とした。その知的な試みはウィーン市民が激しい時代の洗礼を受け、新たな変化に対する応答を求められてきた時、その失敗という形をとって一つの個性的な姿を現す。その模様は文学的タッチで描かれた自伝的著作『傍観者の

時代』(1979年)にも明瞭な形態をとって表れる。『傍観者の時代』は3部から成るドラッカーの自叙伝的作品とはされるものの、その筆致と内容を見るならば、自伝的性格が半分、残り半分は特定の時代についてのノンフィクション小説の趣が強く、その時代考証的色彩はさほど見られない。本稿では彼の思想形成の培養器としてのサロン、そしてギムナジウム時代について見ていくことにし、その際、H・サイモンの示唆にならない、S・ツヴァイクの『昨日の世界』を補強要因として随時参照することにした。

ドラッカーは1919年までシュヴァルツヴァルト小学校に通い、その年の末から1927年の17歳まで地元のデブリング・ギムナジウムに通学する。その間1年飛び級しており、1919年の秋、ギムナジウムの最年少の1年生となっている。彼の時代のギムナジウムは大戦を挟んだとはいえ、ハプスブルク帝国時代の文化をいまだ濃厚に残していた。何よりもギムナジウムの卒業資格は大学進学と一体化していた。ハプスブルク帝国が教育制度を作り上げるのは1850年以降である。ギムナジウムに進学した者は最終学年でマトゥーラなる卒業試験を受験し、それに合格すれば他のドイツ語圏も含む大学入学資格を得ることができた。ギムナジウムでなされた古典教養科目の修得は学生の生活や経験をはるかに越える深遠な世界である。それはしかるべき苦痛をもたらすと同時に、学業に秀でた者には抽象的推論能力のよき訓練の場をも提供した。わけでも、ギリシャやラテンの詩文暗記などは古典・神話に関する広範な知識や卓抜な言語センスを培養するのに大きな役割を果たした。かかる知識傾向もギムナジウム教育の賜と言えた。その効用は次のように説明される^①。

古典翻訳の集中的な訓練は、シンタックスを巧みに使いこなす能力のみならず、即席に弁ずる能力も身につけさせた。これは、頭に浮かぶ考えをすばやく言葉に移し変える作業に他ならない。そして、当時は、古典の引用や暗示が、政治演説でも大学の講義でもしきりと行われていた時代だった。それを耳にすると、学生たちは、昔の賢哲によってはじめられた長い真理探求の道を自分も今、力及ばずともたどる身になったのだと感じた。

いわば言語を通じた知的伝統への敬意、そして自らもその伝統に連なるものとしての矜持を自然に培う場としてギムナジウムは機能していた。他方、教育は厳しかった。当時の学生にとってそこがいかなる意味を持つ場所だったか、

ツヴァイク『昨日の世界』中の「前世紀の学校」ほどに深い慨嘆とともに語られるものもめずらしい。

ツヴァイクがウィーンのマクシミリアン・ギムナジウムに入学するのは10歳の時、1892年だった。卒業はちょうど世紀の節目にあたる。ツヴァイク自身は成人してしばらくしてから、現役の学生たちが自らの青年時代よりもかなり自由な気風の中にいるのを羨望とともに書き記している。『昨日の世界』にあって、わけてもそのギムナジウム体験は時代の象徴としての胸苦しい悪夢として語られる。それはフロイトの「マトウラの夢」とはいかないまでも、戦前から戦中にかけての青年期における悪夢、あるいは被抑圧経験のなかでも典型的部類に属するものと見てよい。まず、科目について、ツヴァイクは次のように述べている⁽²⁾。

自由な時間は学校の宿題にとられ、そのうえ更に、学校とならんで「一般教養」の要求したものは、古典語のギリシャ、ラテンとならぶ「現代の生きた」言語であるフランス語、英語、イタリア語である。——それゆえ、幾何と物理とほかの学科に加えて5カ国語だった。これではあまりにも多過ぎて、肉体的発達、スポーツと散歩にはほとんど全く余地が残されていなかった。特に愉快的遊びや楽しみにはそうだった。

ツヴァイクが『昨日の世界』を執筆したのは晩年のことだったが、それでもなお昨日のことにように記憶が甦ってくるのが読む者にも伝わってくる。なすべき科目は多く、しかも語学は5カ国語、他に自然科学なども加わってくる。しかもその多くはツヴァイクによれば「知るに値しないものの知識」であって、革表紙のなかに閉じ込められた文字の羅列と映ったようだ。ツヴァイク自身はよく知られるように、言葉を手足のように自由に操る、いわば言語の天才である。そんな彼でさえ、ギムナジウム時代の授業はかかる悲哀に堪えざる代物だったのはその場の持つ時代的な雰囲気や伝えている。むしろ歴史を生ける世界として記述していく後に確立される独自の文学スタイルはギムナジウム時代の退屈な授業の反動であった可能性が高い。

事実、早熟な文学青年の常としてツヴァイクは苦痛から逃れるために、早い時期から音楽や劇場、詩作といった芸術の世界に活路を見出していた。後に詩人P・ヴァレリーがツヴァイクに会った折り、10年以上前パリの小さな雑誌に

掲載された無名時代の自らの作品をツヴァイクが既に知っていたのに心から仰天したというエピソードがそのことを物語るものであって、ギムナジウム時代の自由探索の成果だった。そのような意味では、芸術とは多くの青年にとって麻薬の一種であり、彼らのうちには芸術上の創作活動へと邁進する者も多く現れた。ツヴァイクもその一人としてそのような芸術至上主義の熱狂を懐かしく思い出している。毎日ほぼ6時間程度木製の椅子に固定されたことを彼は怨みがましく述べているものの、その怨嗟の念さえ次のように詩的情緒を持って表現されるのはまさしくギムナジウム時代の成果であろう⁽³⁾。

われわれの最も美しく、最も自由であるべき生涯の一時期を徹底的に面白くないものにした、あの単調で無慈悲で活気のない学校作業のうちにあって、私は1度でも「愉快」だったり「幸福」だったりした事実を、思い出すことはできない。

同時にギムナジウムに対して抱かれる負の感情は決してツヴァイク一人のものではなかった。むしろ当時の若者たち一般が抑圧的で時にはサディスティックで固陋な教育機関を悪夢とともに追憶するのが常だった。彼自身、「そのような圧迫を不満をもって感じなかった級友を思い出すことはできない」と書き記している⁽⁴⁾。事実、19世紀後半から20世紀前半のギムナジウムほどに当時の知識ある者の生態を象徴するものはない。ツヴァイクにとってのギムナジウム体験はおおむね陰惨で抑圧的なものだった。なかには生徒の失点を調べ尽くすことに無常の楽しみを覚えるサディスティックな教師がいたり、2、3年経つのに生徒の名前を全く覚えぬ教師がいたりもした。ツヴァイクの忌み嫌うこの種の教師は、青年期の持つエネルギーを本質的に危険視し、あるいは若さというものを一等下に見て、それらを徹底的に管理せねばならぬものとした点で共通していた。いわば教師と生徒の間には常に目に見えぬ権威の柵があり、両者の対話を絶望的なまでに阻害していた。ツヴァイクは「18歳のギムナジウム生徒は、子供のように取り扱われ、煙草を持っているところを押えられると罰せられ、用を足すために生徒用ベンチを離れようとする者は、おとなしく手を挙げねばならなかった」と言う⁽⁵⁾。そんな彼らが半ば現実からの逃避として、芸術や精神の世界に主たる活動の場を求めるのは全く自然の帰結であったに違いない。結果として、ツヴァイクたちの世代の学生は知性と感性において早熟

だった。まだ10歳を過ぎてさほど年月も経たない生徒たちが、リルケをはじめとする無数の詩を自由自在に暗唱し、文学、演劇などあらゆる当世の話題を縦横に論じ合った。教師がシラーを講義するのをよそに、その頃まだ危険視されていたニーチェやストリントベリが回し読みされた。放課後にはカフェに入りし、ウィーンのみならずドイツ、フランスの新聞や雑誌を争って読んだ⁽⁶⁾。

彼らは事実上社会の知的先駆者であり、時代の先端を切ることに何よりも情熱を燃やす人々だった。自ら聞いたことがない新規なものが耳にされると、すぐさま異常なほどの関心を示し、徹底的に知り尽くさねば済まないだけの好奇心の塊だった。ツヴァイクは友人との間で取り交わされたある会話を次のように書きとめている⁽⁷⁾。

当時まだ社会から放逐されていたニーチェを論ずる時、突然われわれの一人が優越を装って、「しかしエゴティズムのイデーにおいてはキエルケゴールのほうが彼よりもすごいね」と言うとする、すぐさまわれわれは不安になるのだった。「Xが知っていて、われわれが知らないキエルケゴールとはどんな人物であろうか。」次の日には、この忘れられたデンマークの哲学者の著書を探し出すために、図書館に押し寄せるのだった。

その種の自由に飛翔してやまぬ精神は、全く正反対の性質を持つギムナジウムという場の産物でもあった。この牢獄を反転のためのばねとして、知の自由へのあくなき探求はむしろ活発になっていった。例えばツヴァイクの世代の学生はリルケやホフマンスタールを尊敬してやまなかった。それというのも単に偉大な詩人であるにとどまらず、この二人は彼ら同様にギムナジウムの窮屈な校舎から巣立った先輩でもあった。ツヴァイクは牢獄のような環境においてさえも、世界というものの無限の美を凝縮する真の詩作は可能なのだということに、真率な感動を表明している⁽⁸⁾。

1-2 20世紀とギムナジウムの精神風土

彼らの約20年後輩にあたるドラッカーの世代も、この種の教養主義的風土は相当地に生き残っていたようだ。ドラッカーがキルケゴールと出会うのは卒業後のことだが、それでもなおキルケゴールを深く読むためにデンマーク語を学んだという⁽⁹⁾。かかる根源的な問いつめのための知的錬磨、精神修養のあり

ようは、ドラッカーが旧態依然たる社会体制のなかにあって進取の魂を持つウィーンの学生気質の継承者であったのを雄弁に物語るものである。他方でドラッカーは最年少の10歳でギムナジウムに入学しつつも、年嵩の同級生に混じって、中の上の成績を維持していた。かなり早い時期から自らの学び方を確立していたと後に語る通り、勉強そのものへの有効な対し方を既に知っていた。ラテン語、ギリシャ語などの古典的教養科目についてもしかるべき成績は残していた。フロイト的な「落第の恐怖」からは無縁だった。学校生活自体は順調だった。だが、その点あまり詳しく書き記していないながら、ドラッカーもまた規律と統制が厳しく支配するこの小空間の中で精神的に倦み疲れていたと想像すべき根拠はある。彼は14歳にして学校の壁の中で自分の居場所を見出せるとも期待していなかったし、いつの日かウィーンを出る自分を夢見ていた。

むしろ彼はそのような閉鎖的な知の牙城から一歩外に出て、ギムナジウム帰りに国立図書館で読書することに喜びを見出していた。当時既に法哲学と社会学の書物を集中的に耽読する生活を経験している。それは彼に独学の流儀とその意味、そして学びという価値の多様性を教えることになった。その点ではサイモンの言うように、碩学ツヴァイクは確実にドラッカーの先輩にあたる実践者と言ってよい。ツヴァイクの思考の背後には、実践が理論に優位し多様が単一にまさるとする信念があった。学習の方法についてそのことを当てはめると、学びにはそれぞれの学び方とリズムが存在し、ある種の型が個々の生命体としての学びのパフォーマンスを最大化するものであって、複数の人間が同じ教室で同一歩調で進められるものであってはならないとする多様性への価値意識が常に横たわる。同時にそれは純粋に学究的なもの、アカデミックなものを本能的に懐疑する思考にもつながってくる。ツヴァイクは言う⁽¹⁰⁾。

私は、あらゆるアカデミックな作業に対するひそやかな、今日でもまだ消えない不信の念さえ持っていた。私にとっては、良書は大学のかわりをする、というエマーソンの原理が、確固として妥当し続けて来た。人は大学、あるいはギムナジウムにさえも通うことなくして、すぐれた哲学者、歴史家、文献学者、法律学者、そのほかの何にでもなりうる、と私は今日でも確信している。

実用の中にこそ真の思想が潜んでおり、実践的行為こそが深い哲学を必要と

するとの信念の表明でもあった。例えばツヴァイクなどは古書店の店主のほうで、文献学の教授よりもしばしば文献に深く通暁していること、あるいは美術商のほうで美術の学者よりもはるかに美の持つ本質的価値に鋭敏な感覚を持ちうることなどを指摘する⁽¹¹⁾。同様に、世の重要な発見の少なからざるものが専門外の人々によるものであって、特定の専門分野を持つ者が多くの場合凡俗の業績しか残しえなかったとする私見をも述べている。ツヴァイク自身はウィーン大学で哲学を専攻し、イッポリート・テーヌについての哲学論文で博士号を取得している。その点彼がシステムティックに知識を扱う作法に適性がないとするのは明らかに見当違いながら、彼はそのような純粹に理論的、形而上的なものが創造における障害ともなりうるとする見解を終生追い払うことができなかった。

彼にあっては、思想や哲学なるものは、現実の生起や形態において個別具体的にしか生成展開しえぬものだった。言い換えれば、思想とは具象を離れて存立しえぬもの、抽象と個物は一体不可分のものだった。かかる世界観はその具体的展開の仕方とは別としても、ドラッカーの青年期に生成されたものときわめて類似するものがある。ドラッカーが教育問題に言及する時、自らは純粹な意味での教育学を専門としたことは一度もないし、恐らく関心もなかったはずである。しかし彼は後々まで当時のギムナジウムをはじめとする高等教育機関が社会的現実から乖離したものだ体感的事実をしつこいまでに強調した。そして、そこで手にした事実を広範に社会的現実に適応し、その多くは知識社会の文脈で論及されることとなった。例えば、彼がギムナジウム時代に学んだラテン語の知識などがその逆機能における典型だった。それは彼の言をそのまま使えば、「呆れるほど易しく、呆れるほど空しかった」⁽¹²⁾。彼はまた「私はオーストリアのギムナジウムでラテン語の不規則動詞の勉強に8年間もかけたが、これは高等教育ではなかったし、いかなる意味においても教育といえるようなものではなかった」とも言う⁽¹³⁾。

彼はしばしばラテン語の諺を引用し役立ててもいる。だが、多くの場合、ラテン語、あるいはその不規則動詞の反復学習が社会的現実との間で意味を失った事実を彼は『断絶の時代』で批判する。むしろ彼は文化としての言語に並々ならぬ意義を認める者であり、ラテン語そのものを無意味として排斥するわけでない。高等教育の基本的性格がいかに社会的接点と無縁となったかを示し、本来あるべき知への復権を示唆するところに目的があった。高等教育のレヴェ

ルとは、その教育がなされる目的によって決まるものでなければならぬということである。というのもラテン語学習の目的は記憶力鍛錬にあるわけではない。むしろ、それは知の伝統における有機的構成の一環と位置づけられてはじめて意味を持つものとなる。彼が不満を示したのは、ラテン語の不規則動詞がその暗記のみにとどまって、その先に広がる地平を見せるにはあまりに狭隘で閉塞したものだったためだった。そこには美と多様性に対する刺激も畏敬の念も感じることができなかった⁽¹⁴⁾。

私の場合、この研究をするにあたって現在使われている言葉であれ死語であれ言語に関連づけたりまたは、文学、文化、歴史に関係づける試みはなにもなされなかった。ラテン語のどの教師からも、ホラティウスやタキトゥスを読む場合の助けとなるものには、その文法的誤りを発見すること以外にはなにも教えてもらえなかった。

確かに社会において機能するために、人は携わる職業にかかわらず一定の基礎的教養を身に付ける必要がある。そのためには、さまざまな領域における術語の修得を不可避とする。術語の修得には言語のみならず数学その他の基礎的知識も含まれる。だがそれらが基礎的教養として意味をなすのは、その全体的構成の中に有機的に組み入れられた場合に限る。彼がここでいわんとするのは、全体と部分、あるいは目的と手段の取り違いによる根本的かつ致命的な錯誤である。実際に、彼はギムナジウムでなされた学習について、負の価値以外の何もも見出していない。その理由として第1にいかなる意味においても有用性がなかったこと、第2にそのために膨大な時間が無益に費やされたことを挙げている。

人は自らの人生のために学び、広くは人間社会のために学ぶ。そこで確実なのは、人は学校のために学ぶのではないし、まして教師のために学ぶのでもないということだった。人はある面で学齢期に受けた教育から一生の影響を受ける。ドラッカーは「ジェスイット派の学校の卒業生はジェスイットに無関心ではいられなくなる。永久に信ずるか、永久に憎むかのいずれかである」という当時の警句を紹介する。確かに教育とは巨大な社会的力である。彼自身におけるその後の進路も思考方法もギムナジウム時代の8年間からいかなる意味においても自由ではありえなかった。とはいえ、退屈な日常に倦み疲れたギムナジ

ウム時代について、彼が後に書き記したものはさほど多くはない。まずもって、彼が当時のギムナジウムに代表される管理教育に生涯よい印象を持つなどということは考えられなかった。

彼はギムナジウムの高学年になってから、校内ではいかにしても得る望みがなく、ゆえに飢渴してやまなかった「生きた経験」を求めて、イギリスかドイツの会社への就職を考えるようになる。それに、ギムナジウムの教師との話し合いでも、もうこれ以上学校に行く必要がないことは確認済みだった。こうして彼は旧陋な閉鎖社会からはじき飛ばされるように、現実の社会を志向し始める。ウィーンのデブリング・ギムナジウムを卒業して直ちに社会に出る。その後1933年にイギリスに渡って以降、1937年に家族に会うために、1955年に講演のためにウィーンに戻った記録があるものの、それ以外はギムナジウムに立ち寄ることはなかった。彼がギムナジウムの同窓会に出席したのは、それから約60年を経た80年代の後半だったのは、彼なりのささやかなウィーンに対する精神的返答であったに違いない。

2 ウィーンへの愛憎——「アトランティスからの報告」をめぐる

2-1 脱ウィーンとシュヴァルツヴァルト夫妻

ここで『傍観者の時代』に戻りたい。本書の第1部は「アトランティスからの報告」と題されるウィーン時代の経験的著述である。アトランティスとはプラトンの著作に登場する伝説の国であって、広大な大陸であり、同時に殷賑を極めた王国でもあった。その王国は強大な軍事力を背景に世界の覇権を握ろうとしたが、その救いがたい驕慢が神ゼウスの逆鱗に触れ、海中に沈められた。アトランティスとは、文化的繁栄を極めつつ、陽炎のようにその実体を失った帰らぬウィーン、彼が少年時代を過ごした欧州の都の隠喩であったのは彼自身も自覚的に記すところである。その記憶はドラッカーの少年時代、すなわち出生から17歳あたりまでの軌跡とほぼ時代的に一致する。

ギムナジウム時代のドラッカーにとっての精神的庇護者の一人だったオイゲニア・シュヴァルツヴァルトがサロンを設立した時、それを一つの事業として展開し、自らもしばしば訪れたことを彼は人生の1ページを彩る挿話として語った。こうしてシュヴァルツヴァルト夫妻を中心に、T・マン、H・モルトケ、S・フロイトなどウィーン最高の知性によって築き上げられた土壌の上に、そ

の後のドラッカーの社会的知の姿勢が開花し、構造化されていくことになる。文化、都市問題、芸術などといったウィーン文化の産み落としていった諸問題を議論しながら、ドラッカーは自らの知的錬磨、感情的陶冶に伴う記憶を鮮明に書きつづる。もっともサロンの先頭を切ったシュヴァルツヴァルト夫妻にしても、古きウィーンへの懐古的志向性を強く持っていた点ではドラッカー少年期の他のウィーン市民と何ら変わりはない。幻影の街アトランティスの焼き直しの性格を持つものであって、またとりわけシュヴァルツヴァルト夫妻が「昨日の街」の象徴的存在と考えられたのは間違いない。当時のドラッカーが独創性において、さほどウィーンで出会った者たちに自らへの影響を認めながらもポジティブな評価を行うことがなかったのはそうしたところにも一因があった。

しかしシュヴァルツヴァルト夫妻が果たした役割は、ドラッカーの関心に基づく知的姿勢の確立と言うよりは、ウィーンを早々に後にする決意を固めさせたところにあった。ヘルマン・シュヴァルツヴァルトが有益な知的影響を与えたことは確かにしても、それは理論的と言うよりは感性的なものだったようだ。その点、さまざまな問題を抱えるとはいえ、夫妻の存在なしには彼のその後のドイツへの転出はなかったであろうし、知的触発もその卓越した指導力を除いて考えられなかった。

とはいいつつも、この夫妻が他の人々と明確な意味で変わっていたわけではなかった。彼らには浮き世離れしたところもなく、「俗物中の俗物」だったという。むしろ二人ともインテリであって、知的で鋭敏な感性を持つものにありがちな情緒起伏や冷笑癖はあったかもしれない。それでも当時のウィーンのみならず、そのような性癖が彼らを特別な存在にすることはない。ドラッカーはこんなとらえどころなき不思議な表現でこの二人を捉えている⁽¹⁵⁾。

二人に接した誰もが——二人を敬愛し、二人に対する批判、嘲笑に耳を傾けようとしなかった者でさえもが——、何やら不快なもの歪んだものが二人の身邊に漂っているのを感じ取った。(略)二人には「何となく気味の悪い」としか言いようのない何かがあった。

そして同時に、ドラッカーの知的形成期にあつてシュヴァルツヴァルト夫妻を位置付けていく時、見落としてならないことは、ともに社会改良主義者とし

での立場をとっていたことである。若き日のドラッカーはいずれこの夫妻を小説に書きたいと思うと同時に、その本質は彼の双手をすり抜けていくであろうとの確かな予兆を抱いていた。小説にできなかったにせよ、彼なりにその外貌をしかるべき確信とともに探り当てたと思ったのはしばらく後のことだったと「アトランティスからの報告」で述べている。それはなぜ自らが初期の代表作『経済人の終わり』を執筆しえたかを彼自身に悟らせる遠因ともなると回顧する。

ヘルマン・シュヴァルツヴァルトとオイゲニア・シュヴァルツヴァルトが、前者が官僚として、後者が実践家としての道を歩みながら強い絆で結ばれていたのは、そうした社会改良への思いにあった。ウィーンの秩序と調和のうちにサロンが一つの事業になるまでの隆盛を極めたというのも、それが当時のウィーンに対する鋭い認識と分析に支えられていたことは、『傍観者の時代』でも示されている。そしてそのなかで、ドラッカーが単に観念だけでなく、強い現実的な志向性と実証的思考の展開に深い理解を持っていたのは、必ずと言ってよいほどに反ウィーン的な文脈で夫妻に言及していることから窺うことができる。

当時の夫妻のサロンにあって、多くの知識人が浅からぬ関わりを持ち、ドラッカーとも交流があったことは比較的良好に知られている。ウィーン時代の彼の思想的軌跡が、そうした先端的な知識人との交流を通して培養されたとされるのは、そうした接触の重さを伝えるものであり、そこで彼らが科学的、客観的考察を公正で自由を生み出す倫理的・道徳的価値と結び付けていこうとした共通の意識を指すものと言える。しかし、そこでドラッカーがシュヴァルツヴァルト夫妻の拠点とするサロンをわざわざ『傍観者の時代』で記したというのも、そこに彼自身がウィーンとの間の精神的軌轍を描こうとしたためであったのは想像に難くない。特にハプスブルグ帝国後期から共和制にいたるまでのウィーンにドラッカーは強い抵抗を感じていたし、先に述べた緊張はギムナジウム時代に頂点に達している。おそらくそこではシュヴァルツヴァルト夫妻のサロンの観察を通して、そのような場の主催者としての夫妻のあり方が、ドラッカーのその後の歩みを分けていったといえるかもしれない。そして、彼にウィーンからの離脱を暗に促す存在と、それを利用する形で実際にドイツに出奔するドラッカーの立場も、『傍観者の時代』を解釈する上で無視しえないところである。しかしそうした緊張関係を抱えながらも、ドラッカーが当時にして自らの

問題意識を多くの点でサロンを取り巻く人々と共有していたことは確かであった。そして夫妻を中心とするサロンの活動が、その後の思想の展開に強く結びついていたことは、先に述べた『経済人の終わり』執筆の直接的な端緒となったことにもよく表れている。

ただし、ウィーンが草創期のドラッカーの熱っぽい雰囲気形成した反面、ウィーンの旧来文化への憎悪は彼が専門性を高めつつ観察者としての力量を高度化する過程で払拭されなければならない性格のものとも捉えられていた。「『戦前』は、物という物に浸透し、人という人を麻痺させ、思想という思想、想像力という想像力の息の根を止める毒気の観があった。『戦前』への執着は、ナチズムがなぜあれほどの魅力を発揮したのか、その訳を説明してくれる」⁽¹⁶⁾と言うように、ドラッカーは自らの心身に浸潤したウィーン文化を意識しながら、それを『経済人の終わり』での直接的な攻撃対象としなければならなかったし、また記述の客観性を確保するために、しばしばそこに進入してくる社会改良的な考え方に熾烈な闘いを挑まなければならなかった。後年彼は、自らが社会主義から学んだことはないと言い切る。これは恐らく彼自身の自負と言うよりも、既に色褪せた古典的な理論や社会改良主義からの脱却がドラッカーを含む世代にとって時代的な要請となっていたことを表出するものと見ることができる。その点は、ウィーンに生まれ育ったドラッカーが、大人の観察者へと脱皮していくのに、避けられない道であったのは間違いない。

執筆当時ドイツに身を置いていた彼は、ある種の感慨を込めてウィーンを語る。20年代、30年代の欧州が「戦前」に取り憑かれていた例として彼が挙げるのは、日常生活、芸術・学問から国民経済の分野まで幅広い。それは流行の食品店からウィーン大学の教授人事、ひいては社会統計の活用手法にまで及んでいた。全て第一次大戦前の価値基準が優先的に選好される例である。「昔は今に優る」が当時の人々の口癖であったという。むろんこのような現実と時代変化は数多くの作家によっても指摘されている。ツヴァイクはその自伝『昨日の世界』において、第一次大戦前を「黄金の安定期」と呼び、この時期約20年においては社会的・政治的生活における反ユダヤ主義が一時的に消滅を伴ったことを記録する。かかる黄金時代の記憶は時とともに消えゆくものではなかった。反対に時とともにいっそうその輝きを増していくものだった⁽¹⁷⁾。「戦前」はあたかも中世のペストのごとくウィーンのみならず欧州全域に蔓延し浸透していった。それは人々から未来への想像力を奪い、精神活動の息の根を止めて

いった。絶望と無感動ばかりが瀰漫した。そのような退嬰的精神風潮は、当時ドイツのケルンにいた後の妻となるドリスが自らの体験として次のように述べることから窺い知られる。⁽¹⁸⁾

「戦前」とは、私たちにとってははかりしれないほどの大昔だった。巨人が丘陵地帯に潜み、赤ずきんちゃんがおばあさんに会いに行き、『イソップ物語』で動物たちが互いに話をしていたより後のずっと後の時代を意味するのだということがどうして私たちに理解できたろう。私たちにとって戦争ははるか昔から気づかないうちに発生していてこの先もずっと続くものだった。

だが、ドラッカーにあって、当時のウィーンをはじめとするヨーロッパの精神的状況は、さらに抜き差しならぬ危機の前兆とも受け止められていた。その一つの例証として、彼は『経済人の終わり』で「大衆の絶望」をファシズム理解の鍵とする⁽¹⁹⁾。絶望した人は内なる不安や破壊衝動を外界の実体的な暴力に投影するようになり、いずれまさに絶望のゆえに奇跡に頼る。不可能を可能とする魔術師にすぎず、ますます自らの現実を拒否するようになる。彼は60年代の著作にいたってさえ、当時の状況をアフォリズム的に「第一次大戦勃発の1914年7月に、有能な経済学者が眠りにつき、その50年後に目覚めてただちに経済統計に目を通したとする。その時彼は、経済が変わったことではなく、むしろあまりに変わっていないことに驚くにちがいない」と表現する⁽²⁰⁾。それは彼のみならず当時を生きた人々の実感だったはずである。精神的鈍磨の様相が生んだ害悪には果てしなかった。ナチズムの足音がすぐそばに迫っているのに、人々はその現実の受容を拒否し続けた。わけでも、知識人や指導者に過る保守的保守主義の傾向が強く見られた。政治指導者、宗教指導者、学問・思想界は現実から目を背け続けた。かのフロイトでさえ、ぎりぎりまでウィーンからの脱出を拒否したとされるのは象徴的エピソードと言える。そのような知識人たちの虚無主義とそれに伴う無能、能天気ぶりをツヴァイクは次のように記している⁽²¹⁾。

ウィーンではカフェに坐っている人々や内閣の人々さえもが、ナチズムを「あちらで」起こっている事柄であり、オーストリアに少しも触れることのできないものと見なしていた。(略)ユダヤ人たちさえも憂慮することなく、

あたかも医師、弁護士、学者、俳優の権利剥奪が起こっているのは中国でのことであって、同じ言語圏の3時間ばかり向こうでのことではないかのように、振る舞っていた。彼らは快適そうに彼らの家々に坐し、自動車を乗り回していた。そのうえ更に各人は慰めの文句を用意しているのだった、「長続きはしまい」と。

少年時代から青年期にかけての崩れ行く文明の姿を描写するのに、ドラッカーは自らの心に映し出された像をありのまま言語に翻訳し、自らの心を時代の試写室とした。それは昔日の文化の都ウィーンの理想像そのものであってシュヴァルツヴァルト夫妻のサロンはまさにその象徴だった。確かにドラッカーが社会に対し観察を重視する研究の道を開いていったのは、ほかならぬサロンで培った実践志向的な問題意識と行動であったし、またそれが彼の観察者としての個性を育て上げる土壌をなしたのは事実である。しかしそれはアメリカに渡るにおよび、旧文明と新文明のせめぎ合いの中で、いっそう熾烈な局面を迎えていくことになる。その様相を確認する時、ウィーンのサロンがドラッカーに果たした大きな影響とその二面性に突き当たることになる。そのネガティヴな面を象徴するものとして、ドラッカーが『傍観者の時代』で題材に選んだのが、アトランティスの比喩とフロイトのパロディだった。それはどのようなものだったのか。ドラッカーの論理展開をもとに見ていくことにしたい。

2-2 ヴィネタの夢

恐らく幼年期のドラッカーがシュヴァルツヴァルト夫妻の関係で会った人物のなかで、そこで大きく時代を画する役割を果たした者がいるとすれば、多くの者がフロイトを挙げるに違いない。確かに、彼の父が政府高官であって、母が精神科医という華々しいドラッカー家を見るかぎり、人生の揺籃期にしてそのような歴史的人物との邂逅が彩りを添えたのは確かである。そのフロイトは、1900年初版の著作『夢判断』で、夢の作用を「情緒の微妙な気分刺激や烈しい感情に対しては極度に敏感で、内面のうごきをただちに外部の彫刻的な具象性に作り変える」と述べている⁽²²⁾。ドラッカー自身は後にフロイトをマルクスと並ぶ批判対象に選ぶのだが、『傍観者の時代』にあって、寓論的に自らの課題を受け取り、実証的な性格を身に付けていくのに、ウィーンからの大胆な脱皮が必要であったことを夢の分析を通して記述している。もちろんドラッカーも

初期にはヨーロッパ文化に傾斜した立場をとっていた。彼の処女作「シュタール論」も、『経済人の終わり』も、そうした傾向を濃厚に持つものであったし、また『産業人の未来』も決してヨーロッパ的立場から抜け出たものではなかった。この時期のドラッカーが、ヨーロッパを中心とした理解を払拭し切れていなかったことは明らかである。

ドラッカーに夢を通して気づかせる契機となったのは、少年時代に愛読した小説セルマ・ラーゲルレーブ『ニルスのおしぎな旅』(原題『ニルス・ホルゲンソンのおしぎなスウェーデン旅行』)だった。本書はいささか空想的なスウェーデンの地理と歴史の旅行案内として当時人気を博していたものであり、スウェーデンの地理や歴史を10歳前後の子供にわかりやすく知らせることが目的とされていた。著者のラーゲルレーブは本書の成功も手伝って、1909年ドラッカーの生まれた年に女性として初めてのノーベル文学賞を受賞している。ドラッカーも幼少期本書を何度も読んだおかげで、「数回しか訪れていないのに、よその国よりもスウェーデンをよく知っているような気がしている」と言う⁽²³⁾。彼がこの作品をどのようにして知ったのかは書かれていない。だが、彼の小学生の頃の教師が19世紀の半ば頃スウェーデンに赴いたことが他の箇所で見られていることから、彼女経由だった可能性もある。その教師は教育学者フレーベルの思想をもとに編成されたスロイドという木工による教育手法を学びにスウェーデンに留学し、スウェーデン語の学位免状を所有していた⁽²⁴⁾。

『ニルスのおしぎな旅』は主人公のニルス少年が妖精に小人に変えられて、白がちょうの背に乗ってスウェーデンを一周する物語である。カルル島近くのヴィネタという都市の話がそのなかに登場する。これが「アトランティス伝説のスウェーデン版」であって、実際には当地に伝わる昔話に取材したものという。ヴィネタは他の都に抜きんでて裕福で幸せだったが、住民は傲慢で虚栄心が強かったために、その天罰として大津波に襲われ海底深くに沈められる。結果としてヴィネタの民は死ぬことも滅びることも許されず、百年に一度往年の姿のまま海上に浮かび上がり、1時間だけこの砂浜に現れることが許される。その1時間の中で、ヴィネタの商人のたった一人でも生きている人間に何かを売ることができれば、この都市は再び現実の世界に戻ることができる。しかし売ることができなければまた海に沈み、次の百年を待たなければならない。『ニルスのおしぎな旅』では、ニルスが偶然海上に浮かび上がったヴィネタにやってくるが、銅貨を持っていなかったために、再びヴィネタは水没したというス

トーリーになっている。

ドラッカーにあって、ヴィネタとは華やかな姿を留めるのみで、死ぬことができない虚栄の街ウィーンの化身として脳裏に残り、アトランティスにも比すべきヴィネタの夢を後々になっても続けて見るようになった。そこが「アトランティスからの報告」と題する根拠となっている。彼自身がニルスと同様に、外部者としてヴィネタに入り込み、その住人を目にすることで恐怖を感じる悪夢を何度も見たことを『傍観者の時代』で告白する⁽²⁵⁾。だが年齢を重ねるにつれ回数は減っていき、アメリカに渡ってから一時完全に見なくなった後、第二次大戦後に再び同じ夢を何度も見るようになる。ただしその時ヴィネタの住人として登場したのはシュヴァルトツヴァルト夫妻であって、それについてフロイトにならい「夢解き」を披露し自己分析する。

まず両大戦の間には、ウィーン全体、ヨーロッパ全体が、「戦前」に取り憑かれていた。ヘルマン・シュヴァルトツヴァルトとオイゲニアはまさにその「戦前」なるものの象徴と解釈する。事実、この夫妻は生活の中にそれを復活させることに成功した。サロンがそれである。彼らのサロンは、海底に生ける屍の都市、アトランティスとして具象化された。他方でそんな戦前の象徴性が彼らの存在自体を不気味なものにした。つまるところ、彼らは帰らぬ過去の幻影、生きつつ死んでおり、死につつ生きる幽霊のごとき存在と観念された。彼らは実際には死んでいるのに、それに気づかず活発に活動を続けた。それが人々に恐怖をも呼び起こした。「おぞましき」の正体はそこにあった。むしろそれは彼ら固有の人間的問題にとどまるものではない。ヘルマン・シュヴァルトツヴァルトとオイゲニアは彼の経験したウィーン、あるいはヨーロッパそのものの象徴だったとドラッカーは言う⁽²⁶⁾。そして、その悲劇の源はあたかもヴィネタの住人のごとく死を許されざるところにあった。

彼らが取引するのは架空の価値であり、架空の商品だった。既にこの世界のどこにもない幻にほかならなかった。彼らは心の底ではそのような自らのありようを知っていた。死を求めためだけに、一枚の「現実の」世界の銅貨を求めていた。いかに20年代、30年代の欧州が戦前の栄光にとらわれていたか、その事実を記述するのにドラッカーの筆は冴え渡る。それは彼自身が見てきたこのうえなくリアルな時代感覚だったし、少年時代からぼんやりと考えてきた「いつの日か自分はこの故郷を後にするだろう」との思いを確信に変えた。そのような問題意識が30年代前半から彼の脳裏に一つの種子として宿り、その

種子が30年代後半に彼の最初の著作として結実することになる。その著作とはいうまでもなく彼の処女作として知られる『経済人の終わり』である。彼は本書でナチズム発生と席卷の原因を探り、その理由として時代を象徴する人間観の変化と現実との乖離に見出している。その意味で本書はその乖離がいかなる社会的・人間的帰結をもたらすかに関する思考実験の書でもあった。

その心象を拳証するものとして、ドラッカーは『経済人の終わり』で「人間観が、社会の性格を定め、個と社会の基本的な関係を定める」と言う⁽²⁷⁾。この一文がいかに彼の著作の基本姿勢を表現してあまりあるものであるかは誰しも認めざるをえないものと言える。ナチズム出現に欠かすことのできない人間観、いわばナチスがその支持を拡大するのにまたとない好餌とした価値意識がそこにはあった。それは、ドラッカー言うところの「戦前を万物の基準とする」当時瀰漫した精神的態度にあった。そうした立場はやがて社会的要因の分析を取り込むことによって、新たな組織の理論へと発展していくことになる。ドラッカーの主要関心はヨーロッパ的なものを超克して、イデオロギーによらざる特定の展開を見せる概念として発展していくことになる。アメリカに渡ってからマネジメントに関わる諸概念は戦前の病魔を克服するという基本テーゼに導かれる。

2-3 『特性のない男』

ここまでのドラッカーによる自らの夢判断であるが、さらに、『傍観者の時代』で自らのウィーン時代の心象を具象化するのに引き合いに出される文学作品がある。当時の文学として画期的な評価を受けたR・ムージルによって1930年に公刊された『特性のない男』(*Der Mann ohne Eigenschaften*)である。ドイツ語圏では著名な作家として、刊行当時は一大センセーションを巻き起こしており、生前は少なくともトーマス・マン、マルセル・ブルスト、ジェームス・ジョイスに比肩する20世紀を代表する偉大な作家の一人とされていた。これはその後の彼の思想形成を見ていく上だけでなく、やがて傍観者として独自の立ち位置から社会観察と分析を示していく彼のパーソナリティを見る上からも重要な意味を持つ。

『特性のない男』は1942年ムージルの死とともに未完に終わる作品である。カカニエンという架空の国、すなわち第一次大戦直前のウィーンに擬せられる国を舞台としており、そこに住むウルリヒなる男についての小説である。ウル

リヒは取り柄のない男ではない。反対に彼は高い技能、能力を保有している。適応能力も高い。軍務経験を持ち工学も修めている。さまざまな知識、能力にも恵まれている。さまざまな面において常人より優れている。それでも人というものが何らかの特性によって決定されているとするならば、「特性のない男」は明確な自己規定を持たない。というのも、彼は独断論、教条主義に徹底的に反対する。唯一の道というものを選択しない。それでもなお、この現実の世界と折り合いを付けて生きることがない。いわば何者でもない生き方をただ継続する。実利を拒否し、自ら行動を起こすことは皆無である。新たな可能性に自らを晒し続ける、「特性なき」男の由来ともなる。この作品が、当時のヨーロッパで広く読まれるだけの位置付けと評価をかちうることとなったのも、恐らくそこにはいくつもの要因が考えられるが、その最大の理由はこの小説が当時のウィーンの直面する最大の問題を一人の人間像を主題に据えて描いていったこと、そしてそのような人間像を素材とすることによって、ウィーンがいかに旧時代のなかに沈んでいくかを個と社会、文化を軸に描出しようとしたところにあった。

ドラッカーは二十歳頃にこの小説を耽読している。彼自身がこの小説をどのように評価し位置づけたかについては『傍観者の時代』を見る限り断片的なものにとどまっている。だが、当時ウィーンに身を置いたドラッカーが第一次大戦後混迷を極める社会にあって、最も重要な争点をそこに見出したのは間違いなく、彼がこの作品の放つメッセージを正確に受け止めていたのがわかる。ドラッカーの個人史との関係性を見ていく時、まず目に付くものとしてこの小説にアンチ・ヒーロー的存在として登場するアルンハイム博士という人物がある。アルンハイムはユダヤ系プロシア人の実業家として登場する。この人物を描くにあたり1922年極右の手で暗殺され、ドラッカー個人にも多大な影響を持つことになるドイツ外相W・ラーテナウをモデルにしたことをムージル自身認めている⁽²⁸⁾。アルンハイムは次のような相貌をまもって登場する⁽²⁹⁾。

アルンハイムが彼の本やパンフレットのなかで告知しているのは、じつに、魂と経済、ないし、理念と権力の和合にほかならないのだった。来るべきものに敏感な嗅覚をもっている感傷的なひとびとは、アルンハイムが世間ではふつつ分離しているこれら二つの極を自分の内部で和合させていると触れまわり、アルンハイムという一つの近代的な力がいつか帝国の、そしてあるい

は、誰が知ろう、世界の運命をよりよいほうに導く途上にあり、かつ、その使命をになっているという噂に有利な条件をつくりだしていた。(略)ウルリヒはアルンハイムを観察した。ところで、ウルリヒが不満なのは、アルンハイムの外貌の個々の特徴ではなくて、その全体だった。個々の特徴——フェニキアふうの、かたい、大商人の頭蓋骨、鋭い、しかし、すくな過ぎる材料でつくられたような、そのため陰翳に乏しい顔、体つき全体の英国仕立ての冷静さ、そして、顔のつぎに人体が衣服のそとにあらわれる場所における、いささか指の短過ぎる手——は十分に注目に値した。ただ、ウルリヒを苛立たせるのは、それら全てがたもっている平衡関係だった。アルンハイムの著書にもこの平衡の確実さがあつた。アルンハイムが考察すると、世界はたちまち整然たる秩序をとるのだった⁽³⁰⁾。

ラーテナウは現実世界では欧州のヒーローであり、少年だったドラッカーに深い影響を持った人だった。そうした現実がこの小説に強く投影されていたことは間違いない。そこで彼らが新時代への適用の中心とした問題群の多くは、直接にそうした現実から受け取られたものであつたにもかかわらず、彼らがそこで目にした社会解体と合理の喪失への態度を決定することはできなかったが、暗に現実の無策を批判する作品という意味でも潜在的にヨーロッパの孕む問題性を暴露するものとして画期的であった。

そこで、ドラッカーは主人公が住む国の名カカニエンに注目している。カカニエンはムージルの造語であつて、このネーミング自体が矛盾と撞着で身動きのとれない戦前のオーストリアの本質を見事なまでに表現していた。そのことについてドラッカーは『特性のない男』の中で、戦前のオーストリアを“Kakania”と呼んだことに共感を表明した」と明瞭に賛辞を表している⁽³¹⁾。“Kakania”とは、旧オーストリア・ハンガリー帝国の公式の略称“K & K (Kaiserlich & Koeniglich)”をもとにしたものである。kakaとは「人の顔」の幼児語で、Kakaniaは汚物の国という意味である。あくまでも意識レベルで当時の人々は戦前のオーストリアに郷愁を感じないばかりか嫌悪に近い感情さえ示している。同時に、現実の行動様式では人々は戦前を万物の基準とし、戦前を愛惜してやまぬ二律背反の情緒に深くとらわれていた。ウィーンそれ自体が自己の分裂に懊悩する神経症の状況だった事実をこの国の名が象徴的に示していた。『特性のない男』でこの国は次のように説明されている⁽³²⁾。

この没落したカカニエンについては、なんとおおくの奇妙なことが語られるだろう！ たとえば、それは帝・王室制でもあれば帝室王室制でもあつた。そこではあらゆる事物と人間が、k・k(kaiserlich-königlich)またはk・u・k(kaiserlich und königlich)という略号のどちらかを付けていた。だがそれにもかかわらず、さまざまな施設や人間のどれにk・kをつけ、どれにk・u・kをつければよいのか、はっきり識別するためには、一種の神秘学が必要だつた。それは文書ではオーストリア＝ハンガリー帝国と名づけられ、口ではオーストリアと呼ばれていた。(略)この空間が描写しにくいことは認めなければならないが、これが、イタリアではイギリスとは別様の彩りをもち、別様にかたちづくられているのが、この二つの国では、別種の色彩と形態をもっているからである。しかし、この空間は、そこかしこではおなじ空間、そのなかに現実が空想に見捨てられた小さな玩具の石の市のように立っている、あの空虚な、眼に見えない空間なのである。

『特性のない男』の舞台は1914年から1918年のオーストリア、特にウィーンに設定されている。文明が一つの峠を越えて、見慣れぬ環境条件に人々が適応力を失い、窒息感を覚えはじめた頃である。社会は爛熟の頂点から一気に地獄の奈落に落とされ、迷走の度合いを深めていく。「特性のない男」は一つの間観を象徴する存在である。ウルリヒは経済的の生を拒否する。さらに言えば、彼は精神の中心軸に何か特定の原理が置かれることをも拒否している。それが特性のない男の意味である。彼は「必要のない金儲けを除けば」、時代に受け入れられる能力と特性が全て自分に備わっていると感じる。しかし、現実には直面しつつも、その現実と直接関わることができない。むしろ彼はいかなる時も新しく出現するもの、言い換えれば可能態としての未来のみを見て、自らの生を来る未来に晒すべき被実験体として捉えている。彼の生活を現象面からのみ見れば、ウルリヒは人生に無頓着な非実用的人間である。だがそのゆえに「可能性の領域」に漂い、未来を見ることができ、分断された2つの時代をとらわれぬ目で見ると、ムージルは第一次大戦後の世界を診断し、その社会の抵抗力のなさ、無意識に感染した深刻な病氣、脆弱な精神状況を小説を通じて描き出そうとした。結果として見えるおぞましい社会の帰趨を描こうとした。この作品の主人公は同時代人の頭脳を刺激し、見えざる映写機を通じて、現実とさ

れるところのものとは異なるもう一つのヨーロッパをそれぞれの脳裏に映し出す存在だった。本作品が30年代の欧州で爆発的に読まれたのも、ムージルが無意識の奥深くで看取した時代感覚に詩的構想力を持って輪郭を与えるのに成功したためにほかならない。

ドラッカーもまたムージルの紡ぎ出す言葉の一つひとつから可能態としての見えざる欧州を見させられた人間の一人だったのは明らかである。ドラッカーが少年時代から無意識に感じていたことが一つの間像に関わるコンセプトとなった時、自分は少なくとも「戦前」の病魔と決別する勇気を持つにいたる。同時に彼には来るべきものの身の毛のよだつ恐ろしさが実感としても理解された。「戦前」症候群なるものは、二度と戻らぬ過去という特性への執着である。そのみにとらわれる時、未来の可能性は絶たれる。ドラッカーはウィーンの間風土を疑問視し、そこに明確な負の輪郭を与えていった彼はそこにおぞましき、この世ならざる不吉な何かを嗅ぎ取っていた。

結語

「若き日の私は、『戦前』から逃れなければいけない、と直観した。できるだけ速やかにウィーンを去ろうと決心したのもそのためだった、と私は確信している」⁽³³⁾。

確かにそこでドラッカーが脱ウィーン、脱戦前のテーマを帰納的、分析的にその意図をどこまで自らの思想形成のうちに貫徹していったかについては、さまざまな問題が残る。しかし彼が第一次大戦前のウィーンにおける価値と態度という社会生活の主観的特性に関わる概念を人間行動の分析の中心に据え、一つの間像たる経済人の発見に向かった時、それが彼の理論において新たな地平を開くものであったのは間違いない。ドラッカーは後に正統性の概念を前面に押し出すことによって、さらに保守的政治論への彫琢を試みていくことになるが、そこで彼がこうした概念の提示によって、社会的現実に対する個の主観的意味づけを通して文明観察を進めていったところに手法の特性を見ることになる。そして彼が旧秩序の無効と廃棄を宣言することによって自説の展開を図っていく時、それは必然的にその後形成される独特のデタッチメントを特徴とする非定住型な知の道程と人間社会を中心とする分析視座を約束していくことになる。そして彼がそれらの概念を武器として、同時に個のヨーロッパ時代

の経験の徹底的な活用により、一つの組織に関わる体系的な方法論を確立し、経験的な実証研究の展開とともに、社会を理解する視座の上で全く新しい段階に足を踏み入れていくことになる。そして1939年『経済人の終わり』がアメリカで公刊され、それがヨーロッパとアメリカの双方の視点が入っている点でまさしく非定住性の記念碑的研究であり、同時に転換点をなす作品として破格の評価を得るのはいずれもそうした彼の知的戦略の賜としてよい。

もっとも改めてウィーン時代のドラッカーの思想形成に接するならば、その問題と方法についてはさまざまな論議にも出会うことになる。例えば、個の生活史が、態度と価値の提起、社会的秩序の描出、人間類型の把握にどの程度寄与したかどうかについては、必ずしも一義的に断定することはできない。その理由としてほぼ唯一の原典とも言える『傍観者の時代』の持つ微妙な性格によるところも大きい。本書はドラッカー自身の執筆の意図を見ても、人物や出来事をめぐって展開されていくその筆致が、歴史的事実としてどの程度の正確さを持つものか、必ずしも検討の余地がないわけではない。その点では、ここで提出された彼の会った人々や読書歴、その解釈などが経験的事実と合致するものなのかどうか明瞭さを欠く。事実、本書には実在が確認されない人間像や、事実と照らした場合明らかに不正確とされる記述が多く含まれている⁽³⁴⁾。

しかし、そうしたいくつかの重要な問題を残しながらも、『傍観者の時代』が一つの彼の生活史を踏まえた主観的・経験的世界として一つの体系を持ち、また個の間像記録が、社会科学的方法論に則っていなくとも、その内面世界を理解するにあって意味を持つのは否定できない。実際に、本書で展開される言説空間が、多くの疑義を呈しながらも今なお読まれ続け、世界的可読性を高めている事実が恐らく彼の示した方法論と問題把握の革新性を表すものと言えるだろう。そしてそれがいかに当時のヨーロッパからアメリカにいたる人間群像の展開にあって刺激的なものを孕んでいたか、いくつかの批判点を留保した上で、『傍観者の時代』「アトランティスからの報告」を持って彼が示したものは、まず社会における主観的要因の必要性と重要性を自らの卓越した筆致をもって示したことがある。そこでは彼が自らの目を通して見たヨーロッパ時代の経験が人間記録として描かれている。また、自らの夢などを題材に、適度のフィクションを織り交ぜながら、人間観の枠組みと社会の輪郭をストーリーとして描き、そのなかでパーソナリティや社会観、社会の解体といった多くの後年の重要な言説と接続する問題をさりげなく提起している。そこでは彼の洞察

とともに、刺激的な一般化、内容豊かな観察技法を通して、当時のウィーン社会の特質を引き出し、それを明らかにしている。

言うまでもなくドラッカーの理説を現代社会との関連のなかで問題としていくならば、そこではさらに多くの検討課題が与えられることになるだろう。そして、その文脈からドラッカーのウィーン時代を捉える時、彼がヨーロッパにおける第一次大戦後の文化変容と社会変動の争点を集中的に取り上げた書き手の一人であったことは忘れてならない着眼点といえる。その意味でドラッカーのウィーン時代は、後の社会観察からマネジメントの形成にあたって、その青年期への移行の過程で決定的な役割を果たしただけでなく、戦後社会が直面する方法論的な課題に挑戦することによって、そこに非定住戦略のなかの「知的定住」の獲得を可能ならしめた時代であったと言わなければならない。

【参考文献】

- H・ケルゼン／長尾龍一訳『ハンス・ケルゼン自伝』慈学選書, 2007年
 M・M・ジョンストン／井上修一・岩切正介・林部圭一訳『ウィーン精神 I』みすず書房, 1982年
 S・ツヴァイク／原田義人訳『昨日の世界 I』みすず書房, 1999年
 S・ツヴァイク／原田義人訳『昨日の世界 II』みすず書房, 1999年
 H・パクター／蔭山宏・柴田陽弘訳『ワイマール・エチュード』みすず書房, 1989年
 S・フロイト／高橋義孝訳『夢判断』(上) 新潮文庫, 1969年
 R・ムージル／高橋義孝訳『特性のない男』(1) 新潮社, 1964年
 D. Drucker, *Invent Radium or I'll Pull Your Hair*, The University of Chicago Press, 2004
 H. Simon, "Man of the Past, Man of the Future," W. W. Weber. ed., *Peter F. Drucker's Next Management*, Verlag, 2010
 P. F. Drucker, *The End of Economic Man*, John Day, 1939
 P. F. Drucker, *The Future of Industrial Man*, John Day, 1942
 P. F. Drucker, *Landmarks of Tomorrow*, HarperCollins, 1957
 P. F. Drucker, *The Age of Discontinuity*, HarperCollins, 1968
 P. F. Drucker, *Adventures of a Bystander*, HarperCollins, 1978

【注】

- (1) M・M・ジョンストン／井上修一・岩切正介・林部圭一訳『ウィーン精神 I』みすず書房, 1982年, 102頁。
 (2) S・ツヴァイク／原田義人訳『昨日の世界 I』みすず書房, 1999年, 53-54頁。
 (3) S・ツヴァイク／原田義人訳『昨日の世界 I』みすず書房, 1999年, 54頁。

- (4) S・ツヴァイク／原田義人訳『昨日の世界 I』みすず書房, 1999年, 53-54頁。
 (5) S・ツヴァイク／原田義人訳『昨日の世界 I』みすず書房, 1999年, 53-54頁。
 (6) S・ツヴァイク／原田義人訳『昨日の世界 I』みすず書房, 1999年, 68頁。
 (7) S・ツヴァイク／原田義人訳『昨日の世界 I』みすず書房, 1999年, 70頁。
 (8) S・ツヴァイク／原田義人訳『昨日の世界 I』みすず書房, 1999年, 71頁。
 (9) H. Simon, "Man of the Past, Man of the Future," W. W. Weber. ed., *Peter F. Drucker's Next Management*, Verlag, 2010, p.66.
 (10) S・ツヴァイク／原田義人訳『昨日の世界 I』みすず書房, 1999年, 146頁。
 (11) S・ツヴァイク／原田義人訳『昨日の世界 I』みすず書房, 1999年, 146頁。
 (12) P. F. Drucker, *Adventures of a Bystander*, HarperCollins, 1978, p.72.
 (13) P. F. Drucker, *The Age of Discontinuity*, HarperCollins, 1968, p.255.
 (14) P. F. Drucker, *Landmarks of Tomorrow*, HarperCollins, 1957, pp.147-148.
 (15) P. F. Drucker, *Adventures of a Bystander*, HarperCollins, 1978, p.57.
 (16) P. F. Drucker, *Adventures of a Bystander*, HarperCollins, 1978, p.59.
 (17) S・ツヴァイク／原田義人訳『昨日の世界 I』みすず書房, 1999年, 45頁。
 (18) D. Drucker, *Invent Radium or I'll Pull Your Hair*, The University of Chicago Press, 2004.
 (19) P. F. Drucker, *The End of Economic Man*, John Day, 1939, p.22.
 (20) P. F. Drucker, *The Age of Discontinuity*, HarperCollins, 1968, p.4.
 (21) S・ツヴァイク／原田義人訳『昨日の世界 II』みすず書房, 1999年, 557-558頁。
 (22) S・フロイト／高橋義孝訳『夢判断』(上) 新潮文庫, 1969年, 147頁。
 (23) P. F. Drucker, *Adventures of a Bystander*, HarperCollins, 1978, p.57.
 (24) P. F. Drucker, *Adventures of a Bystander*, HarperCollins, 1978, p.67.
 (25) P. F. Drucker, *Adventures of a Bystander*, HarperCollins, 1978, p.58.
 (26) P. F. Drucker, *Adventures of a Bystander*, HarperCollins, 1978, p.58.
 (27) P. F. Drucker, *The Future of Industrial Man*, John Day, 1942, p.32.
 (28) H・パクター／蔭山宏・柴田陽弘訳『ワイマール・エチュード』みすず書房, 1989年, 191頁。
 (29) R・ムージル／高橋義孝訳『特性のない男』(1) 新潮社, 1964年, 114頁。
 (30) R・ムージル／高橋義孝訳『特性のない男』(1) 新潮社, 1964年, 193頁。
 (31) P. F. Drucker, *Adventures of a Bystander*, HarperCollins, 1978, p.58.
 (32) R・ムージル／高橋義孝訳『特性のない男』(1) 新潮社, 1964年, 32-33頁。
 (33) P. F. Drucker, *Adventures of a Bystander*, HarperCollins, 1978, p.59.
 (34) H・ケルゼン／長尾龍一訳『ハンス・ケルゼン自伝』慈学選書, 2007年の長尾龍一による解説(115-118頁)。

【略歴】1972年埼玉県生まれ。東京大学大学院修了。東洋経済新報社勤務。早稲田大学特別研究員。